

巻頭言

科学における存在の問題

三宅 美博

科学は「存在」の問題を避けてきた。ある意味で「存在」は科学の天敵かもしれない。科学は、研究対象の存在を自明化し、そのメカニズムを調べるどころから活動を開始するからである。たとえば Nature 誌に掲載されている論文の第一段落を読んでほしい。そこには、必ずといっていいほど、「○○○は興味深い現象である。」と天狗的に言い切った上で、「○○○のメカニズムは充分には明らかにされていない。」と続き、「本研究は○○○を明らかにする。」という風に、極めて定型的な言い回しが見られる。

このあたりに不慣れな学生は、論文をまとめる際に、ストーリーの展開を逆構成してゆく中で、最終的にイントロダクションの第1文にぶつかるのである。なぜ、この研究対象に取り組むのか？それを論理的に構成できない…と。多くの学生は、このような状況にさえぶつからないかもしれない。特に、流行の研究分野で活動している場合には、対象の重要性は自明であり無批判に受け入れてしまうからである。むしろ、それを問わないことによって成功した知的活動が科学であると言えるかもしれないのだ。

ただ、これだけのことをもって科学には限界があると批判するのは早計である。ここでは科学を以下の3つのカテゴリーに分けて考えてみよう。まず、第1のカテゴリーであるが、自然界において対象を容易に定義できる領域は比較的多く、そこで対象Aと対象Bの因果関係を記述できれば通常の科学としては大成功である。ただ、私の個人的経験からすれば、この第1カテゴリーに分類されるのは観察可能な現象の1割未満であると思う。残りの9割以上は、いわゆる意味づけのできないデータであり、次の第2カテゴリーに入る。それは、対象Aと対象Bの相互作用は推定できても、因果関係までは証明できない場合である。これは複雑系的科学が問題にしている領域であろう。

しかし、もっと深刻な事態がある。それが第3のカテゴリーであり、対象とその対象を規定している観察者との関係が問題になる領域である。言い換えれば、研究対象の存在そのものを問題にするということだ。ここでは科学的観察や記述そのものが不可能になる。このカテゴリーが顕在化するのには、観察者自身が系に含まれてしまうような場合であり、人間や社会を対象とする学問は、多かれ少なかれこのような側面を持っている。意味やコミュニケーションの領域に踏み込もうとすると、人間のインタラクションをその外側から見ただけでは観察できないからである。

これは、何かがここに在ることが、他の何かがそこに在ることと不可分に関係している場合である。しかし、人間の生存や社会の存続にとっての本質的な事態は、むしろそのような領域であろう。その最たるものは自己意識であるが、これは状況とその文脈に応じて時々刻々と創出されるものであり、交換できないこと、いまここにしかないことを特徴とする。このような「存在」に関わる現象は心身問題とも深く関わっており、基本的に科学の対象としてはなじまないものであった。

一方、社会に目を移せば、いまや安全や安心という人間のころろに関わる問題が非常に

重要になりつつある。社会システムのあらゆるレベルでコミュニティの崩壊が進み、人を信じられない時代にわれわれは生きているからである。この背景に「存在」の問題を無視してきた科学があり、それに基づいて構成された社会システムやITコミュニケーションシステムがあることを皆感じ取っている。このような時代だからこそ、システムから遊離したところの帰るべき場所を人々は探しているのだ。安全や安心というところの居場所を求め始めているのである。

いまこそ、われわれは科学の前提条件を見直す必要があるのではないだろうか。科学における「存在」の問題に目を向けなければならない時期が来ていると私は思う。

(東京工業大学・大学院総合理工学研究科・知能システム科学専攻)